

# 長編小説「清きタミルの流れ」における ルネ・ジラルールの「欲望の三角形理論」

ティフエヌ・カーン (Тифэн Канн / Typhaine Cann)  
(モンゴル国立大学ウランバートル校博士研究生)

キーワード: 「欲望の三角形」理論、「模倣された欲望 (欲望の模倣)」理論、ルネ・ジラルール、Ch.ロドイダンバ、「清きタミルの流れ」、師弟の濃密な関係、文学

## 要旨

いくつかのすぐれた文学作品の例に依拠しながら初めて考案された、フランスの哲学者、歴史家、人類学者ルネ・ジラルール [René Girard] の「模倣された欲望 (欲望の模倣)」という理論は、人類の中に暴力の関係が何から生じたのかを解き明かす目的を持っている。そしてジラルールは、暴力とは賞賛や敬服とともに生じる羨望や嫉妬から生まれると結論づけた。私たちはこの論文 [発表] でジラルールの理論を取り上げ、Ch.ロドイダンバの長編小説「清きタミルの流れ」に登場するいくつかの人物形象のあいだの関係を分析した。

ジラルールにとって、師弟の濃密な関係は信頼と敬服に基づいているが、敬服と羨望の間隔はきわめて狭く、この二つのあいだで羨望が強すぎると、弟子は自分の師を敬愛する代わりに憎悪し、自分の仇敵と見なすようになる。M.セルバンテスの「ドン・キホーテ」、G.フローベールの「ボヴァリー夫人」、スタンダールの「赤と黒」、M.プルーストの「失われた時を求めて」、F.ドストエフスキーの「地下室の手記」「永遠の夫」「未成年」などの諸作品を研究したジラルールは、「媒介」という概念を作り上げる。そしてこの「媒介」を「外的媒介」と「内的媒介」という二種類に分類する。「外的媒介」は師弟のあいだの間隔が非常に広いので、羨望や嫉妬は生まれず、弟子は自分の師を敬愛し模倣する。しかし、国民主権の社会で人と人とのあいだの間隔が狭くなるにつれて、弟子は自分の師を自分の手本 (モデル) と見なさなくなり、師にあるすべてのものを欲するようになる。しかしそれらを共有することはできないので、自分の師を敬愛する代わりに憎悪するようになる。ジラルールの理論では、自分の師にあるそれらのものは重要ではなく変えることはできるが、[弟子の]「欲望」は引き続き変わらずに残るのである。

このような理論を取り上げて、モンゴルで権威のある Ch.ロドイダンバのすぐれた長編小説「清きタミルの流れ」に登場するイトゲルト、エルデネ、ドルゴルなどの人物形象のあいだの関係を分析することを旨とした。